

【調査報告】

南風原の地域づくりと南風原文化センター

中尾 友香、池田 法子、杉山 天心

Regional Development of Haebaru and Haebaru Town Museum

NAKAO, Yuka & IKEDA, Noriko & SUGIYAMA, Tenshin

1. 沖縄・南風原調査の概要

2014年2月12日~14日、COC事業の一環として実施する「京都の地域リソース実践学」の企画・運営への示唆を得るために、沖縄県の南風原地域における地域づくり活動に関する調査を実施した。南風原地域では、独自の伝統行事が地域住民の手によって今日まで受け継がれるとともに、南風原文化センターを拠点として沖縄戦を初めとする地域の歴史が伝承されてきた。したがって、京北とは全く異なる地域の文化実践を調査することで、京北に対するより相対的な視点が得られると思われた。

本調査では、3日間の全行程の中で南風原文化センター、翔南製糖工場、南風原町立中央公民館を見学し、さらに首里城や識名園等の文化施設を訪問し市内散策を行った。特に、南風原文化センターの前館長である大城和喜氏と、同センターの学芸員である平良次子氏との南風原における地域づくりに関するインタビューでは、地域における伝統文化の継承と、地域住民の人間関係の構築という観点から、貴重な示唆を得られた。以下、本調査報告は、調査者のうち3名の学生の報告・考察を取り上げる。

2. 沖縄調査から得られた地域を考える視点

沖縄・南風原では「人との繋がり」の強さを京都大学からの参加者全員が感じた。しかし、南風原町喜屋武の人達が言う「人との繋がり」と、京都から来た私たちの言う「人との繋がり」とは少し違った意味合いを持っていると感じた。南風原町における「人との繋がり」という意味を考察して、最後に京北で活動する際の示唆を得たい。

南風原町の人も、自分たちの持っている繋がりについては自覚的であり、特徴として強調もしていた。筆者は、その強さに影響を与えているものとして次の3つがあると考えた。①人間関係を基盤とした地域観、②信頼して任せるといった人間関係、③繋がり確認機会の多さ、である。これらはもちろん互いに影響しあい重なる部分も多いと思われるが、それぞれの特徴を考えるために以下で分けて考察する。

①人間関係を基盤とした地域観

南風原町喜屋武内では、「先輩」「後輩」という呼びかけ方がある。一般的に「先輩」「後輩」という呼びかけは、同じ学校や会社などに在籍していた者同士の関係を指し、喜屋武で行われているように、地域に住んでいる人同士を指すことは少ないと思われる。このことは、喜屋武では地域全体がひとつの組織として強く意識されていることを表しているのではないだろうか。つまり、南風原の人が「地域」というとき、単に住んでいる土地や範囲がイメージされているのではなく、「先輩」「同期」「後輩」という立体的な人間関係、そして具体的な人の顔がイメージされているということである。

さらに、そのような「地域」の活動では若者に「役割」が与えられる、と大城さんはおっしゃっていた。初日の食事会で、その「役割」の与え方を垣間見た場面がある。大城さんは、京都からの参加者内での年少者を確認していた。それが杉山さんと分かり、また、杉山さんが京北に関わっても重要な位置を占めていることが分かれると、杉山さんに対して具体的な声掛けが増えていた。「天心、泡盛！」や「天心、コーヒー追加！」などである。文字にすると威圧的だが、その場の雰囲気や言い方、和やかな表情からはそのようなことは感じられなかった。人間関係に含められているという安心感も与えていると思われた。

「先輩」「後輩」という顔の見える人間関係が基盤の地域であること、かつ、自分がその人間関係に含まれていることが確認できる地域であると感じられた。

②信頼して任せるといふ人間関係

2日目の夜に、お酒を飲みながら大城さんが南風原文化センターの初代社会教育主事だった頃のお話を伺った。ある企画の開催日に台風が直撃する予報で、開催が危ぶまれた。外部講師を依頼していたのだが、当日来てもらえるかも難しい状況だった。大城さんは開催したがっていることを知っていた初代館長は、「責任は全部私がつから」と言ってくれたそうだ。開催に踏み切ったところ、当日は他の施設の開催するイベントは中止になったため、訪れた人から「台風で暇だった、開催してくれてありがとう」と声をかけられたそうだ。大城さんは、この時の館長の姿勢をととても尊敬しているようだ。「影響を受けていますか」とお聞きしたところ、テーブルの向かいにいる次子さんを見やりながら「そうね、だから次子さんにはやりきってほしい」とおっしゃっていた。

①で述べたような人間関係のうえに、文化センターやふるさと再生区民の会、その他さまざまな活動がある。しかし、ただ「ある」だけではない。それらの活動は、初代館長と大城さん、大城さんと次子さんの間にある信頼関係に支えられたものであった。大城さんや次子さんは住民の方とも信頼関係を築いており、主催する活動やお祭りでは立場に関係なく、信頼して任せるといふことを大切にしていると感じた。

③繋がり確認機会の多さ

次子さんは、文化センターで関わった子どもたちや住民との「繋がり」を維持するために、「ハガキ交換」「進路相談」「アオギリ.com」を実践されている。さらに、スーパーで会った保護者と世間話などもしており、そこでは日常生活で起こった何気ないことを共有しているという。

地域の人間関係のハブのような存在である「センターの人」と住民とが日常的に「繋が

り」を確認できることは、南風原は地域の繋がりが強いという住民の意識にも大きく影響していると思われた。

今後京北で活動しながら京北の特徴を理解するためにはどうすればよいだろうか。沖縄調査では、南風原の人も京都大学の人も口にしてきた「人との繋がり」を切り口にするので、地域の特徴を考えることが出来た。京北で活動する際にも、京北の人と京大メンバーが共通して注目しているものを、細かく分析することで京北の特徴を考えることができるのではないかと。例えば「林業」は京北の人も強調し、京大メンバーも魅力を感じた点である。生活ベース、行動ベースで精緻に見ていくことが両者にとって新鮮な発見になるのではないかと思う。

(中尾友香)

3. 南風原における地域文化の継承にふれて

いったいどうして、こんなに人を巻き込むことができるのだろうか。南風原町でのフィールドワークを通して、人と人、世代と世代の間におけるつながりの強さが特に印象に残った。少子高齢化、ライフスタイルの変化による伝統産業の衰退といった社会問題が、例外的に南風原町では影を落としていない訳ではない。それにも拘わらず、大城さんを中心として、町の人々が地域を足場にして強く結束しているように見えることに、筆者は強く引き付けられた。

中心人物から始まる「つながり」の連鎖

南風原の伝統行事は、住民の個々の力が結集して形になり、それが時空を越えて継承されていく。言い換えれば、一つの伝統行事は限られた中心人物のみだけでは成立しないのである。大城さんは、「片手では音は出ないけれど、両手でたたけば音が出る」と語る。南風原センターや居酒屋で、まっすぐにこちらを見て話す大城さんの瞳に、筆者はいつも吸い込まれるような気がしていた。さらに、大城さんは泡盛や伝統的な沖縄料理、そして三味線の調べとともに、和やかに温かな雰囲気を作り出し出していく。喜屋武の伝統行事を続けていく大城さんのカリスマ性とは、その場を温めて人と人との距離を縮めていき、人を引き込む力であるように思われた。地域という一つの共同体レベルでの行事を実現させていくために、個と個の「つながり」を連鎖させていこうとする働きかけが、大変印象的であった。

南風原の歴史を継承し、地域の「今」を創出する

本土と陸を隔てる沖縄は、独自の歴史を紡いできた。南風原文化センターでは、第二次世界大戦における南風原の沖縄戦から、戦後、生活を再建するまでの歴史が伝えられている。実際に展示を見ていると、時間が足りなくなってしまう。地域の小・中学生が訪問した際に、展示から得た情報を書き込むワークシートもあり、展示に興味を持たせるための工夫がされていると感じた。

地域における南風原文化センターの役割とは、展示を通して地域の歴史を学ぶだけでな

く、住民自身がつながる「場」でもある。例えば、現在の南風原文化センターを6年前に改装した際には、多くの住民が改装を手伝い、展示する内容も住民がともに考えたという。また、同センターは、喜屋武の伝統行事の拠点としての機能も担っている。同センターの学芸員の次子さんが、「センターを核として、色々な人が繋がり、活動が広がっていくような仕組みを創りたい」と語っていたように、南風原文化センターは地域の「過去」から「現在」を繋げるとともに、「今」を生きる住民同士がつながり、「これからの南風原」を創出していく空間であった。

地域の祭りを〈生産〉する

調査の中で特に印象的だったのは、大城さんの「祭りとは〈消費〉ではなく〈生産〉である」という言葉である。〈生産〉とはすなわち、祭りの参加者の心の奥底から湧き上がる積極的な姿勢や熱意であると推察される。一方、祭りの〈消費〉とは、嫌なことを無理矢理やらされるようなイメージが浮かぶ。筆者にとって「祭りを〈生産〉する」という表現は、非常に新鮮であると同時に、妙に納得させられるような感覚があった。伝統行事という制度に個人が縛られるのではなく、むしろ自分自身にとって祭りが本当に大事なものである、という感覚が新鮮に感じられたのは、筆者自身がこれまで地域の伝統行事を〈消費〉してきたからかもしれない。

大城さんは、〈生産〉において重要なのは「ハチマキしめず、拳も振り上げず、緻密に淡々とやっていくこと」であると語る。一時的な頑張りによって燃え尽きるのではなく(喜屋武の伝統行事の綱引きでは恐るべき住民のエネルギーが燃え上がるとはいえ)、地域の伝統行事が個々の生活におけるライフワークの中から〈生産〉されることが重要なのだろう。

地域づくりへの示唆

南風原地域での調査から得られた地域づくりに関してどのような示唆が得られたと言えるだろうか。南風原では、地域の伝統行事が地域づくりにおいて重要な位置づけにある。地域の伝統行事を創出するのは、日常生活から形成される人と人とのつながりであり、地域の「過去」と「今」をつなぐ時空である。その活動拠点として南風原文化センターという文化施設が存在し、個々の働きかけという地道な努力がある。人と人が支え合いながら、地域の行事を楽しむことで、地域の伝統行事が継承されていくのだと思う。

(池田法子)

4. 沖縄視察からの示唆

・「帰属意識」の限界

ある集団に帰属しているという意識は、「自分とは違う」ものに出会う場合や、「集団で何かに取り組む」という際に発揮されるのでは、と考えた。しかしながら、その意識が実際の行動へうつる動機となるのは、せいぜい1000人程度が限界なのでは、とも思った。つまり、5000人程度になると集団の構成員の「顔」がわからず「誰か」となってしまう、その結果、何かあっても「誰か」がやってくれるだろう、という意識になるのでは、と思

った。ここから京北に対して言えることは、「京北」というくくりの有効性である。5000 人程度の「京北」は「京北町」という単位が消滅し、区議選出の単位すら有していない現状、何ら法的根拠を持った単位ではない。「京北」において「地域活性化」を考える際の「地域」は本当に「京北」なのか、再考すべきであろう。実は「顔」のわかる単位の「山国」や「周山」といった単位での活動が限界である可能性はないだろうか。

・資金力の問題

南風原の人たちは否定していたが、やはり、資金力の違いが物を言うようなきがした。潤沢な資金や人口増等、南風原は現在好条件にあり、「京北」に真似できることでもないのでは、と考えた。

・「にぎわい」「活性化」について

これは沖縄から得たことだけではないが、現在人口減や高齢化に悩まされる自治体は、産業の再興、新興と外部からの移住者募集によって対応を図る傾向がみられるが、そういった自治体の住民が「にぎわい」や「活性化」という言葉によって表現しているものは、本当にそういった産業や人口の問題なのだろうか。「限界集落」の概念を提唱した大野晃氏も、集落の区分の根本に集落での集团的行為を営めるか否かを置いている。ここから考えたことは、そういった地域の人々が求めていることは、本当は、行事や祭り、冠婚葬祭のように、地域の住民が、「みんなでなにかをすること」ではなかろうか、ということである。日本全体で人口が減りつつあり、移民の議論までなされるような現状においては、地域に人を呼び込むというような方策より、むしろ地域から人が出ていかないような方策や、地域での生活が充実するほうが優先なのではないか、と考えた。

(杉山天心)

〈謝辞〉

南風原文化センター前館長の大城和喜氏と同センター学芸員の平良次子氏をはじめ、調査でお会いした南風原地域のみなさまに大変お世話になりました。この場を借りて厚く御礼申し上げます。

¹ 大城和喜「南風原町喜屋武における伝統行事と子ども・青年 ―現場からのレポート」相庭和彦・渡邊洋子編著『日中韓の生涯学習 ―伝統文化の効用と歴史認識の共有』明石ライブラリー、2013 に詳しい。